

## 『自然と実学』創刊にあたって

小川晴久

二十一世紀を迎えるに当って、私たちの心は明るくない。先進工業国（北）に住む私たちが今のよう  
なエネルギーを沢山使い、大量消費する生活様式を続ける限り、地球の生態系は一層破壊され、地  
球の未来がないことがハッキリしてきたからである。科学・技術の研究・開発をやめろというのでは  
ない。それらはかけがえのない地球の生態系保存のために、これからは奉仕しなければならない。…

…

このような課題がハッキリしてくるにつれて、東アジア世界でいえば一七世紀から一九世紀中頃ま  
での、日本でいう、近世の学問や産業のあり方、価値観が、新しい魅力をもって私たちの目に映って  
くる。近代が実現した自由と平等は決して手放してはならぬ。しかし近代が失ってしまった大切なも  
のをまだ保持していた近世。二十一世紀が切り拓かなければならない新しい生活様式を構築するに当  
って、示唆に富む価値観と生き方を豊かに持っていた時代。

この近世を今までのように近代につながる要素だけを評価するという視角ではなく、後の近代を、  
生態系を守る視点からトータルに批判できる独自の価値をもった時代としてとらえる新しい近世像。  
農業社会をおくれた停滞した社会であったとみたり、貨幣経済の発達を社会発展の尺度とみるような、  
これまでの社会発展観の見直しも必要となるであろう。

私たちの日本東アジア実学研究会は一九九四年に誕生した。一九九〇年から始まった、東アジア三  
国の近世の学問を実学ととらえ、二年ごとに研究を交流する東アジア実学国際シンポジウムを日本で  
主催したときに私たちの研究会は出発した。ここでいう実学とは近代以後の実用の学としての、いわ  
ゆる実学ではなく、東アジアの十八世紀に開花した真実を重んずる、学問の総体的規定としての、実  
学である。(福沢諭吉に代表される)近代的「実学」の実践に余念のない日本では、江戸時代の学問(と  
りわけ江戸儒学)を近代批判の視点からとらえ直してみようという自覚は依然として弱い。

二十一世紀の学問のあり方、文明観や生活様式の改変をはかるために、私たちは主に東アジアの近  
世、とくに日本の近世から、できるだけ多くのものを学ぶつもりであるが、このような課題に役立つ  
ものであれば、洋の東西を問わず、また時代必ずしも近世に限定せず、誌面を作り、研究を重ねてい  
く。地球の生態系を守るための学問、そのためにこそ科学や技術は奉仕しなければならぬという思い  
を込め、近世の実学から学び、近代(現代)の実学を改変するために、本誌の名を「自然と実学」と  
命名することにした。……思いを同じくする人々との交流、協働、そして入会を広く求め、呼びかけ  
たいと思う。本誌が一人でも多くの人々によって読まれることを願う。

二〇〇〇年六月